

総合治水めざす ダム中止後の松倉川

ルポライター 滝川 康治

「松川河口水系の川の形態について、歴史的な変化をきちんと把握し、洪水の原因をはつきりさせる必要がある。そこから短期・長期的な治水対策の議論を始めることが大切だ」

西鉄「妻高木本町」にすてては、二回開催され、松倉川水系の治水や環境保全にする多くの意見が出されている。今後専門部会の研究者らのアドバイスをけながら、「ダム中止後の総合治水策」を一々一年がかりでまとめあげいくことになる。

「時のアセス」で建設中止になった松倉ダムに代わる総合治水計画を、住民参加型でつくろうとする試みが函館市で始まった。市民・行政・研究者の連携によって、川に負担を集中させず、面的な治水整備の具体策を煮詰める。これから河川公共事業のモデルになりうる「函館方式」の取りくみをリポートする。

現場を見ながら 治水対策の議論

現場を見ながら 治水対策の議論



松倉川総合治水計画の立案に向けた「検討会」には、住民による地域部会と研究者らの専門部会の二つがある。写真の専門部会はアドバイス役だ（5月31日、函館市内で）

の両館市がつくった見学校ルートは、市内の人団密集地を流れ下る鰐川（松倉川の支流。長さ約9キロ）に重点がおかれている。山奥のダムで洪水を調節する投資効果の乏しいやり方を転換し、水害が多発してきた支流の手当

を考へるためのルート、といえる
委員たちに乗せたマイクロバス

は、宅地造成や産廃処分場の建設の経緯などについて説明も一。眼下に望む開発され尽した流域の姿に、委員たちは驚きの表情を見せた。

「効果はあるのか?」といった質問が飛ぶ。このあたりは、川というよりコンクリートで固めた排水路で、すぐそばには住宅が迫るが、一九七〇年代までは水田や湿地帯が広がり、川は蛇行していたという。わずか三十年ほどの間の急激な開発が洪水被害を拡大させた。都市計画のあり方を根本から変えないと、水害と治水対策のイタチごっこになるだけではないか……。

道用水の確保

倉ダム計画は、八年前に市民の前に登場した。しかし、道や市が掲げた治水や利水の計画には代替策があるうえに、道南でも毛指の清流を誇る松倉川の自然環境がダムによって失われることを理由に、市民のなかから建設を疑問視する運動が発生。九七年、道はこうした動きを受ける形で松倉ダムを「時のアセス」の対象事業にした。

一年あまりにわたった再評価作業では、市内の町内会長や市民グループ、松倉川流域の住民を対象にした説明会や、十五人の市民委員による意見交換会を開くなど、事業者側が市民の声を積極的に聴く試みがなされた。

わたしは一昨年、意見交換会を取材しているが、市民委員同士の認識の差が大きいことに加えて、行政側の説明が長すぎなどの問題が目だった。

松倉川流域の住民を対象にした説明会や、十五人の市民委員による意見交換会を開くなど、事業者側が市民の声を積極的に聴いて試みがなされた。わたしは、昨年、意見交換会を取材しているが、市民委員同士の認識の差が大きいことに加えて、行政側の説明が長すぎるなどの問題が目だった。「消化不良のままだ」「もつと話し合いの場を」といった声が続出し、行政側も治水対策をめぐる具体的な議論ができる場をつくることを約束していた（本連載第2回「松倉ダムと『時のアセス』の再評価」を参照）。

松倉川流域の住民を対象にした説明会や、十五人の市民委員による意見交換会を開くなど、事業者側が市民の声を積極的に聴いて試みがなされた。わたしは、昨年、意見交換会を取材しているが、市民委員同士の認識の差が大きいことに加えて、行政側の説明が長すぎなどの問題が目だつた。「消化不良のままだ」「もつと話し合いの場を」といった声が続出し、行政側も治水対策をめぐる具体的な議論ができる場をつくることを約束していた。本連載第2回「松倉ダムと『時のアセス』の再評価」を参照。

OPPO JOURNAL



排水路と化した鮫川(右)と深堀川の合流部は、水害の多発地域だ



洪水被害が起きている鮫川の流域を見学する検討会の委員ら

なった

として、道は九八年十月に事業の中止を決定。今後の治水対策については、

「住民の皆さん方の意見をもとに、学識経験者の協力をいたたきながら、さまざまな方策を調査検討して効果的な対策を練り上げてまいりたい」(堀達也知事)との方針を示していた。

この方針に沿って、河川工事だけにとどまらず、下水道の処理や都市計画との関係、森林伐採の問題などを含めた総合的な治水対策を議論する場として、今年三月に設置されたのが冒頭の検討会だった。

行政主導を脱却 主役は地域住民

検討会は、とかく問題の多い行政主導型を改めて、計画の策定段階から住民が参加する方式を試みてきた。

その要になるのが地域部会で、松倉川と鮫川、湯の川、湯の沢川の流域の町内会をはじめ、農林水産団体や温泉旅館協同組合、市民グループ、青年会議所などの代表十七人が委員になつた。三月の第一回検討会では、市の発

掘るのは絶対にやめるべきだ。どうしても必要ならば、市民会館の駐車場に造るべきだ

「洪水には」通りある。(低地に水があふれてまる)「内水氾濫か(川の水があふれて起きる)外水氾濫か、原因をはつきりさせるべきだ」

「この部会は、現在の川を拡幅するという議論なのか。新しい遊水地などを造るという話なのか?」

これは三月下旬に開いた初部会で出された声の一部。治水に対する委員の捉え方はさまざまである。泥水によるコンブの漁獲量の変化や昔の川の様子、下水道が不備で污水が直接川に入っている話、河川改修のことなど、出される意見は多岐にわたり、なかには陳情型の発言もあつた。一口に「総合治水対策を議論する」といつても、委員にとっては慣れない作業なだけに、戸惑う様子がうかがえる。

部会の議事録を読んで感心するのは、事務局の函館市の対応だ。裏方に徹しつつ、出された質問に答えられなかった事柄について、次回の部会までに補足回答や説明資料を用意するなど、きめ細かに心えている。

また、函館や札幌の研究者らによる専門部会はアドバイス役という位置づけ。「川づくりの主役は流域で暮らす住民」という、新河川法の精神を踏まえた運営を志向している。

町づくり含めて 大胆な具体策を

さまざまな団体を代表する委員たち

▲松倉川の下流部はこの30年間で人口密集地になり、河川が治水を負担するのは限界に達している(最初の支流が鮫川)

河川が治水を

展と川との関わりについて、郷土史家の講演を聴いたりした。

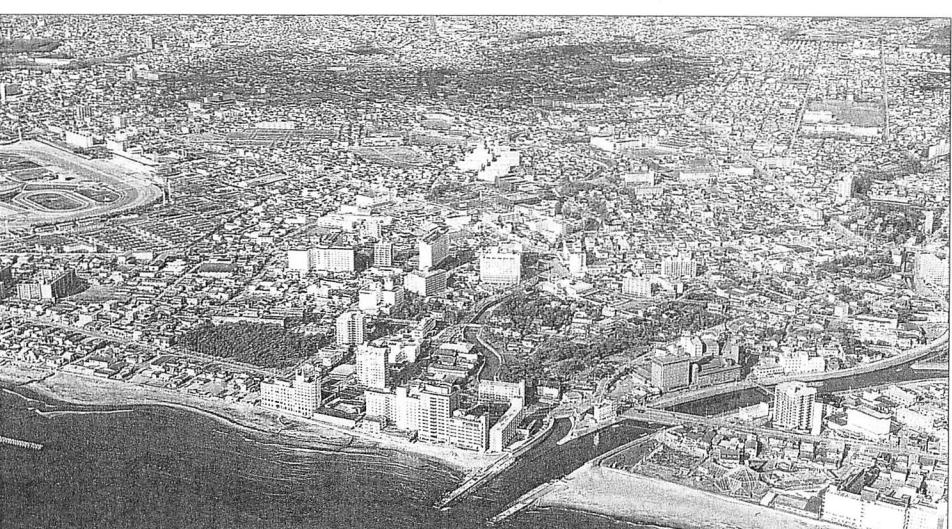
すでに二回の地域部会が開かれており、互いの共通認識を得るために、地域部会のな

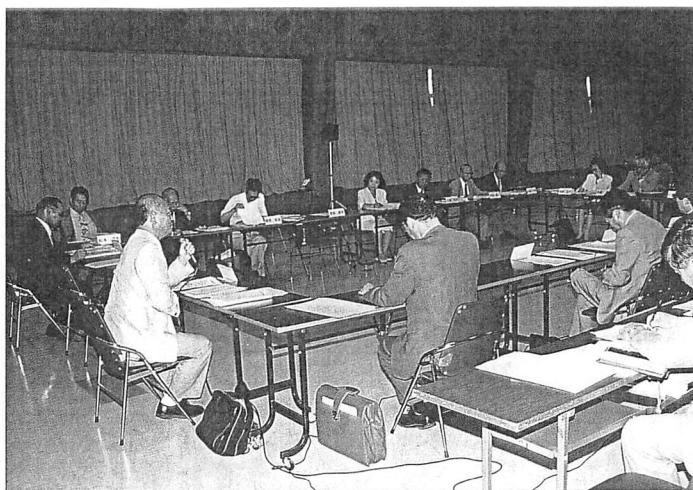
かにワーキンググループも設置された。こうして出された意見を専門部会に伝えながら、

両者が一堂に会する検討会で話し合いを重ねる。そのなかで、総合治水についての合意づけをめざしている。

と書いてしまって単なのが、実際には試行錯誤のくり返しのようだ。

「内水対策をきちっとやらないで、遊水地を





「今回の検討会のきっかけをつくれた
時のアセス」の意見交換会（98年8月）

そのものの問題であり、函館の町づくりビジョンを書き換えなければ（検討会がめざす）総合治水計画は実効力がなくなる。検討会がまとめた「答申」には、町づくりビジョンを盛った具体的な方針が必要だ。ぜひとも、具体策をまとめていきたい（謙鹿さん）

と語り、都市計画のあり方にまで踏みこんだ議論をめざしていた。

「住民と行政が共通に立てる基盤は何なのか、わたくしたち自身も手探りのところがある。住民同士が思うところをさらけ出してもらい、共通認識ができるれば具体的な治水の手法なら次の段階に進めるでしょう」と受け止めるのは、事務局の中心を担っている函館市道路河川課の阿部正二・河川係長である。

面的な治水整備に向けて、市役所内には都市建設部や下水道部、農林水産部、総務部の課長級でつくるプロジェクトチームがすでに発足している。現在は民間コンサルタントが作成した資料などを検討中だが、今後は検討会と一緒に治水対策の構想を作る

方針。ゆくゆくは、その構想を実行に移す作業も担っていく、という。

「時のアセス」のころ、表舞台に登場していたのは道函館土木現業所だった。しかし、今は「地元のことは我々がやる」と函館市が前面に立つ。これも、松倉ダムが中止になつた経過や新河川法の精神を踏まえたものだ。

一方、河川管理者の道は「先人觀を持たれるような、こちらからどうこう誘導したり」することはしない（建設部河川課）として、検討会の議論を見守っている。

同課の小室裕一参事（兼ダム室長）は、「これからは函館方式のような形が治水対策の主流になつていく。」公共事業が分かれにくく「役所主導だ」といった批判をよく聞くが、それとは違つた展開になる、と大いに期待している。この試みは、全道のモデルになるとがすでに発足している。現在は民間ダム計画を取りやめ、計画段階に戻るでしょう」と期待感を示す。

方針。ゆくゆくは、その構想を実行していくこともできるだろう。

九七年に改正された新河川法は、河川整備にあたつて自治体や住民の意見を反映させていくことを明記している。こうした流れを受けて、開発局が管理する道内の一級河川では「流域懇談会」を設置して意見を聴くなどの試みを始めてはいるが、やはり行政主導の運営が目だつ。「函館方式」は一步先を行っている。

道の担当者の弁にあるように、白紙の状態で住民同士が議論し、具体的な対策を立案していく手法は、これから公共事業すべてにとって必要なことである。松倉川の例に倣つて、現場を見ながら考へ、議論していくばかり良い方法が見つかることはだ。『松倉川の試み』は、これから河川事業や都市計画について、モデルケースになりうる可能性を持つている。

ゴルフ場などを森林に復元する試みや、市街地での雨水貯留施設づくりなどをめぐって、ハードとソフトの両面で大胆な計画を立ててもいいだろう。一年後、一年後に総合治水対策がどう実を結ぶのか、楽しみである。